

令和 7 年 5 月 22 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2024

課題番号：20K10879

研究課題名（和文）統合失調症をもつ人の家族レジリエンスを高めるための看護支援プログラムの効果検証

研究課題名（英文）Examining the Effectiveness of a Nursing Support Program to Enhance Family Resilience in People with Schizophrenia

研究代表者

川口 めぐみ（Kawaguchi, Megumi）

福井大学・学術研究院医学系部門・准教授

研究者番号：40554556

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、統合失調症をもつ人の親を対象に看護支援プログラムで介入し、介入した親および未介入の子を含めて、唾液ストレスセンサの定量評価、および、家族レジリエンスと精神健康尺度評価の双方から効果を検証することであった。

看護支援プログラムにて介入した親は、ストレスの低減とレジリエンスの向上が見られ、介入8週後も持続していた。このことから、看護支援プログラムの一定の効果が示された。しかし、子に関しては、ストレス度およびレジリエンスの値が上下した。

本研究は、コロナ禍の影響も受け、対象者数が非常に限定されたため、介入・評価方法を再検討し、研究を継続していくことが重要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

統合失調症をもつ人の好発年齢は、思春期から青年期であることから、その支援は親に委ねられている事例が多い。しかし、親は統合失調症をもつ子の支援に苦悩を抱えているとの報告もある。また、親の子への対処によっては、統合失調症をもつ人の再発率を高める。このことから、親への支援は統合失調症をもつ人およびその親双方にとって重要である。

本研究により、統合失調症をもつ人の親への看護支援プログラムの介入に対して一定の効果が示された。このことは、親への支援体制構築の一助となる。

研究成果の概要（英文）：This study examined the effects of a nursing support program for people with schizophrenia on both the parents and their children. Quantitative salivary stress sensor ratings and family resilience and mental health scale ratings were used to examine the effects of the intervention.

The results showed that parents who received the intervention experienced reduced stress and increased resilience, which persisted eight weeks after the intervention ended. These results indicated a certain level of effectiveness of the program. However, the stress levels and resilience values of the children fluctuated.

Due to the limited number of subjects in this study because of the Coronavirus pandemic, it is important to review the intervention and evaluation methods and continue the study.

研究分野：メンタルヘルス

キーワード：統合失調症をもつ人 親 レジリエンス 唾液ストレスセンサ

1. 研究開始当初の背景

わが国では、精神疾患をもつ人が住み慣れた地域で暮らすために、必要なサービスを導入し、その人を支援する地域包括ケアシステムの構築が急務となっている。精神疾患の中でも統合失調症は、好発年齢が成長途上の思春期から青年期であることから¹⁾、多くの場合発症時に本人を支えるのは親であると考えられる。また、慢性的に経過し再発しやすく、症状として社会生活能力の低下があることから¹⁾、長期的な支えも必要とする。実際に2018年の全国精神保健福祉会連合会の調査では、精神疾患をもつ人の生活を支えているのは85.0%が親であり、家族の支援を受ける精神疾患をもつ人のうち、統合失調症が80.3%を占めていた²⁾。このことから、システムを構築するためには、統合失調症をもつ人とその親への支援を検討することが重要となる。統合失調症をもつ人を支える家族の研究では、1987年にヘイリーが本人の症状改善のためには、家族内対人関係にアプローチする家族療法の有効性を明らかにしており、以降数多くの研究が実施されている³⁾。我が国においても、家族成員と統合失調症をもつ人との接触時間が増えることで、彼らに対する「敵意」「批判的」「情緒的巻きこまれすぎ」の感情を生むことが報告されている⁴⁾。また、家族成員が統合失調症をもつ人に対してこれらの感情表出を伴う対処を行うことは、統合失調症をもつ人のストレス因となり再発率を高める⁵⁾。これらのことから、統合失調症をもつ人の再発を予防し地域での生活を支援するためには、家族成員の中でも特に本人との接触の多い親に対する負担軽減のための支援が検討されている。

一方で、人が困難な状況に直面しても回復することができる力であるレジリエンスという概念に着目した研究もある。レジリエンス研究は、重篤な障害を持ちつつも、適応を示す人の内的な強さという個人のもつ力に焦点を当てた研究から始まっている⁶⁾。その後、ワルシュによって家族という集団が周囲との関係性や他者からの援助によって家族の機能的なシステムを変化させ、回復する力を獲得するという家族レジリエンス理論が提唱されている⁷⁾。ハウリーは、家族レジリエンスをアセスメントし、問題を抱えた家族の将来の可能性を見出すためには、家族の本来持っているレジリエンスを発揮したり高めたりするための支援が重要であることを明らかにしている⁸⁾。わが国における家族レジリエンス研究には、得津らの研究⁹⁾がある。得津らの家族レジリエンス理論に基づき、喪失体験¹⁰⁾、低出生児^[11-12]、障害児の家族¹³⁾、知的障害児の家族¹⁴⁾、高齢者¹⁵⁾、被災家族^[16-19]、国内外の文献をレビューした研究^[20-21]が進んでいる。しかし、わが国において統合失調症をもつ人の家族レジリエンスの研究報告は、中平らの家族レジリエンスとしての家族システム力を明らかにした研究²²⁾以外にはなく、親への看護支援によって介入した親および未介入の統合失調症をもつひと双方の家族レジリエンスがどのように変化するかは明らかにされていない。

2. 研究の目的

本研究では、統合失調症をもつ人の親に面談とソーシャルスキルトレーニング、心理教育による家族レジリエンスを高めるための看護支援プログラムで介入し、その効果の採りが簡便で人体に非侵襲である唾液中ストレスセンサの定量的評価、および精神健康度と家族レジリエンスの測定尺度を用いた主観的評価の両側面から検証することを目的とした。なお、先行研究⁵⁾において家族成員の感情表出を伴う対応によって統合失調症をもつ人の再発率を高めることが報告されていることから、プログラムの介入は親のみとするが、親への介入が子にも変化を与えるのかを同時に明らかにするために、観察および検査項目による評価は親および子の双方に実施した。

3. 研究の方法

1) 研究対象者

以下の基準をすべて満たす DSM-5 の診断基準に合致した統合失調症もつ人およびその親を対象とした。なお、親への看護支援プログラムでの介入が統合失調症をもつ人の家族レジリエンスにも変化を与えるかを調査するため、本人と親の双方に参加を依頼した。

< 統合失調症をもつ人 >

同意取得時において、年齢が16歳以上の方

性別：不問

初回の統合失調症の診断を受けてから3年以内の方

研究参加にあたり、主治医により診断に適合し、十分な判断力が認められるとの理由から研究参加への許可の得られた方

本研究への参加にあたり十分な説明を受けた後、十分な理解の上、本人の自由意思による文書同意が得られた方

< 統合失調症をもつ人の親 >

年齢：不問

性別：不問

統合失調症をもつ人と同居している

本研究への参加にあたり十分な説明を受けた後、十分な理解の上、本人の自由意思に

よる文書同意が得られた方

2) 調査内容

聞き取りによる調査を実施する項目

- ・親の背景：氏名、性別、年齢、家族構成
- ・統合失調症をもつ人の背景：年齢、性別、初回診断からの期間、利用している社会資源の内容
- ・精神健康度（中川らの精神健康調査票 GHQ28） アンケート形式による聞き取り
- ・家族の困難からの回復力：家族レジリエンス（得津・日下の家族レジリエンス尺度）アンケート形式による聞き取り

唾液採取からの項目

- ・唾液中ストレスセンサ（アミラーゼ、コルチゾール）

3) 調査方法（スケジュール）

項目	ベースライン調査 期間		看護支援プログラム介入期間						フォロ ーアッ プ 期間
	0	4 週目	8 週目	12 週目	16 週目	20 週目	24 週目	28 週目	36 週目
調査実施	調査 1	調査 2	調査 3	調査 4	調査 5	調査 6	調査 7	調査 8	調査 9
介入（親のみ）			介入 1	介入 2	介入 3	介入 4	介入 5	介入 6	
	心理教育								
	ソーシャルスキルトレーニング								
	面談								
対象者および子の背景の確認 *1									
同意取得 *2									
精神健康度 *3									
家族レジリエンス *4									
ストレスセンサ（アミラーゼ）*5									
ストレスセンサ（コルチゾール）*6									

：親のみの項目、 ：親および子双方の項目

調査の実施および看護支援プログラムの介入は、子の受診している病院の外来個室で実施。

調査日時は、子どもの外来受診時、対象者の希望に沿って調整した

3) 分析方法

唾液中アミラーゼとコルチゾール量については、調査 1 および調査 2 の値の平均値をベースライン値とした。ストレス度および家族レジリエンスの各尺度得点については、調査 1 での値をベースライン値とした。

唾液中アミラーゼとコルチゾール量、ストレス度および家族レジリエンスの各尺度得点において、ベースライン値と調査 8、調査 9 の値を比較した。

4. 研究成果

本研究の開始年度からコロナウイルス感染症が世界で大流行した。そのため、実質的な研究開始が2年遅れた。このことで計画通りに研究を遂行することが非常に厳しい状況であった。研究計画および実施施設の調整を行い、研究機関内に3事例（親2事例、統合失調症をもつ人1事例）に対する介入を終了した。その結果得られた成果は以下のとおりである。

1) 家族レジリエンスを高めるための看護支援プログラムの開発

研究者らの前研究の知見から、本研究の開始にあたって、精神疾患をもつ当事者グループからの助言を受けて、家族レジリエンスを高めるための看護支援プログラムを完成させた。その成果は、第41回日本看護科学学会にて報告した。また、Journal of Interdisciplinary Research of the School of Medical Sciences, University of Fukui 23巻にて原著論文として公表した。

2) 家族レジリエンスを高めるための看護支援プログラムの効果検証（親）

統合失調症をもつ人の親を対象に家族レジリエンスを高めるための看護支援を実施し、プログラムを実施した親の効果を検証した。その結果、親の家族レジリエンスは上昇し、精神健康度の値は改善した。また、唾液ストレスセンサの値においても改善が見られ、プログラム実施8週後も効果が継続していた。本結果は、第50回日本看護研究学会にて発表した。

3) 家族レジリエンスを高めるための看護支援プログラムの効果検証（親子比較）

統合失調症をもつ人の親を対象に家族レジリエンスを高めるための看護支援を実施し、プログラムを実施した親および統合失調症をもつ子双方において効果を検証した。その結果、プログラム介入をした親の家族レジリエンスは上昇し、精神健康度の値は改善した。また、唾液ストレスセンサの値においても改善が見られ、プログラム実施後も効果が継続していた。しかし、プログラム介入を実施していない子については、親の面談内容から、就労訓練施設での仕事内容からのストレスによってストレス度が増したことで、研究期間中それぞれの評価指標が上下した。

このことから、プログラムの実施により、子のストレスが増大しても親の家族レジリエンスおよびストレスは軽減することが明らかとなった。一方で、親子の相互作用によって、子のストレスがどのように変化するかについては、明確でなく、課題を残した。本成果は、27th East Asian Forum of Nursing Scholarsにて発表した。

<引用文献>

- 1) 武井 麻子、江口 重行、末安 民生、他．精神看護の基礎．第5章、医学書院、2020．
- 2) 全国精神福祉会連合会．精神障がい者の自立した地域生活の推進と家族が安心して生活できるための効果的な家族支援等のあり方に関する全国調査．2018．
- 3) 日本家族研究・家族療法学会、家族療法テキストブック．金剛出版、2013．
- 4) 伊藤 順一郎、大島 巖、坂野 純子、他．EE(expressed emotion)と再発．脳と精神の医学．3(2): 163-173．1992．
- 5) 大島 巖、伊藤 順一郎、柳橋 雅彦、他．精神分裂病者を支える家族の生活機能と EE (expressed emotion)の関連．精神神経学雑誌．96(7): 493-512、1994．
- 6) Garmezy, N. Vulnerability research and the issue of primary prevention. American Journal of Orthopsychiatry. 41: 101-116、1971．
- 7) Froma, W. The concept of family resilience; Crisis and challenge. Family Process. 35(3): 261-281、1996．
- 8) Hawley, D. R.、Dehaan, L. Toward definition of family resilience; Integration life-span and family perspectives. Family Process. 35(3): 283-298、1996．
- 9) 得津 慎子、日下 菜穂子．家族レジリエンス尺度(FRI)作成による家族レジリエンス概念の臨床的導入のための検討．家族心理学研究．20(2): 99-108、2006．
- 10) 大山寧寧．喪失体験からの回復過程における家族レジリエンス要因の検討．家族心理学研究．28(2): 120-135、2015．
- 11) 永富 宏明、法橋 尚宏．低出生体重で生まれた未就学児をもつ家族の家族レジリエンスとその影響因子．家族看護学研究．21(1): 14-24、2015．
- 12) 南 香奈、島田 啓子、藤田 景子．超・極低出生体重児の両親が語る家族レジリエンス．日本助産学会誌．31(2): 153-164、2017．
- 13) 宮谷 恵、市江 和子．成人期に達した医療的ケアのある長期在宅障害児(者)家族のレジリエンス構成要素 - 主介護者である母親の認識からの分析 - ．日本小児看護学会誌．27: 114-121、2018．
- 14) 入江 安子、津村 智恵子．知的発達障害児を抱える家族のファミリーレジリエンスを育成するための家族介入モデルの開発．日本看護学会誌．31(4): 34-45、2011．
- 15) 川口 めぐみ、東間 正人、田中 悠二、他．地域で生活する高齢者の家族レジリエンス．福井大学医学部研究雑誌．18: 21-31、2018．
- 16) 田井 雅子、池添 志乃、瓜生 浩子、他．被災した家族に現れる家族の境界の様相 - 被災後における家族レジリエンスを促す看護援助の実践から - ．高知女子大学看護学会誌．45(1):

37-47、2019 .

- 17) 瓜生 浩子、池添 志乃、畠山 卓也、他 . 被災した家族が経験する苦悩と “ 苦悩の連鎖が止まるように導く ” 看護アプローチ . 高知女子大学看護学会誌 . 45 (2): 37-48、2020 .
- 18) 野嶋 佐由美、池添 志乃、井上 さやか、他 . 災害後における家族レジリエンスを促す7つの看護アプローチ . 高知女子大学看護学会誌 . 43 (2): 24-36、2018 .
- 19) 池添 志乃、瓜生 浩子、田井 雅子、他 . 災害後における家族レジリエンスを促す “ 立ち上がる力を発揮できるように導く ” 看護アプローチ . 高知女子大学看護学会誌 . 45 (2): 27-36、2020 .
- 20) 高橋 泉 . 「 家族レジリエンス 」 概念分析 - 病気や障害を抱える子供の家族支援における有用性 日本小児看護学会誌 . 22 (3): 1-8、2013 .
- 21) 河原 宣子、本郷 隆浩、小林 奈美 . 家族レジリエンスの概念を用いた研究の動向 - わが国の災害看護実践への適用可能性の検討 - . 家族看護研究 . 19 (2): 114-123、2014 .
- 22) 中平 洋子、野嶋 佐由美 . 精神障がい者の家族 Family Resilience としての ‘ Living System 力の発現 ’ 家族看護学研究 . 22 (1): 2-14、2016 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Megumi Kawaguchi, Kazuyo Kitaoka, Miho Katayama, Hiromi Morioka, Midori Kawamura, Akiyo Nakamoto	4. 巻 23
2. 論文標題 Developing “Patients and Public Involvement” Nursing Support Program to Improve People with Schizophrenia’s Family Resilience	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Interdisciplinary Research of the School of Medical Sciences, University of Fukui	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Megumi Kawaguchi, Takaharu Hirai
2. 発表標題 Effectiveness of a Support Program for the Parents of Patients with Schizophrenia Using a Saliva Stress Sensor: Single Case Study
3. 学会等名 27th East Asian Forum of Nursing Scholars（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 川口 めぐみ
2. 発表標題 統合失調症をもつ人の母親への看護支援プログラムの効果検証 ～2事例のパイロットスタディ～
3. 学会等名 第50回日本看護研究学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 川口めぐみ、北岡和代、森岡広美、片山美穂、中本明世、川村みどり
2. 発表標題 精神疾患をもつ当事者を「研究アドバイザー」として起用した看護支援プログラムの開発過程
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	北岡 和代 (Kitaoka Kazuyo) (60326080)	公立小松大学・保健医療学部・教授 (23304)	
研究 分担者	平井 孝治 (Hirai Takaharu) (70723013)	福井大学・学術研究院医学系部門・助教 (13401)	
研究 分担者	長谷川 美香 (Hasegawa Mika) (90266669)	福井大学・学術研究院医学系部門・教授 (13401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------